

中 学 校

平成 2 2 年度

教育研究員研究報告書

道 徳

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題について	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	3
IV	研究方法	3
V	研究内容	6
VI	研究の成果	14
VII	今後の課題	15

研究主題 語り合いを重視した心に響く道德の時間の工夫

I 研究主題について

PISA調査をはじめ、国や都の各種調査からは、思考力・判断力・表現力等を問う読解や記述式の問題、知識・技能を活用する問題についての正答率の低さ、また家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣・生活習慣の低下や自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下など児童・生徒について、様々な課題が浮き彫りにされた。

このことは、例えば、公の場で自分の言葉で自分の考えを語る事が苦手な生徒、あいさつなどの基本的な生活習慣が身に付いていない生徒、将来の夢や希望をもてない生徒、自分に自信をもてない生徒が多い、という生徒の実態からもうかがえる。

この課題を受け、学習指導要領には「改善の基本的な考え」として7点が示されている。そのうちの「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」については、徳育や体育の充実のほか、国語をはじめとする言語に関する能力の重視や体験活動の充実により、他者、社会、自然・環境と関わる中で、これらとともに生きる自分への自信をもたせる必要があるとの提言が示されている。

また、中学校学習指導要領解説道德編には、改善の具体的事項10項目の一つに「(カ) 道德的価値観の形成を図る観点から、書く活動や語り合う活動など自己の心情・判断等を表現する機会を充実し、自らの道德的な成長を実感できるようにする。」と示されている。そこで、生徒の現状や学習指導要領の趣旨を受け、本分科会では「語り合う活動」に着目し、研究を進めることにした。

中学校の「道德の時間」の現状としては、ワークシートにあらかじめ用意された発問に自分の考えを書かせ、それを読ませるだけの授業であったり、教師からの問いかけに対して生徒が答える一問一答式や、教師に指名されて答えるという授業の流れであったりすることが多く、生徒が自発的に発言したり、生徒同士が互いの意見を語り合ったりする授業展開にならないことが多い。教師がよく練った発問であれば、教師と生徒の一問一答式でも考えは深まると思えるが、さらに一步進めた生徒同士が積極的に語り合う道德の時間を目指したい。

このようなことから、語り合いを重視していくことで、道德の時間のより一層の充実を図り、生徒の心に響く授業の構築ができるのではないかと本分科会では考えた。心に響く授業とは、道德の時間を通して、道德的な価値について生徒が自覚を深め、道德的実践力につながっていくような道德の授業である。そして、何年か経っても生徒の心に残っているような授業である。道德の授業で学んだことがすぐに実践力につながっていくものではないが、道德の授業において心に響く授業を繰り返し続けていくことで、生徒の心は揺さぶられ、よりよい生き方を目指していこうとする生徒の姿が見られるようになると思う。また、心に響く道德の授業を行うためには、生徒同士が心を開き合えるような人間関係、学習環境が必須であり、しっかりとした学級経営の実践も大切である。

生徒同士がお互いに本音で語り合い、刺激し合い、心に響くような授業を展開していけたら、さらに道德的価値の自覚を深めることができると考え、本主題を設定した。

II 研究の視点

研究を行うに当たり、道徳の時間における「語り合い」とはどのようなことであるかを考えた。道徳の内容の捉え方では、「教師と生徒が人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合い、その実行に努めるための共通の課題である」（中学校学習指導要領解説道徳編 P 36）と記載されており、「話し合い」と似た「語り合い」という言葉が使われている。道徳の時間における「話し合い」と「語り合い」の違いについて、道徳教育に関わる様々な文献を調べたが、明確な違いについて見付けることはできなかった。

「話す」と「語る」の意味の違いは、「話す」は「声に出して、事柄や自分の考えを伝える、説明する」であり、「語る」は「一つの話として、相手に伝える」（新明解国語辞典）とあり、違いを明確にできなかった。辞書によっては、ほぼ同じ意味で記載されているものもあった。しかし、「語らう」で調べてみると「打ち解けて話し合う」（新明解国語辞典）とあり、「話し合う」よりも、「語り合う」の方が、人間関係が醸成され、心をより表現していることであると捉えることができると本研究では考えた。

また、「話し合い」は結論や決定事項を求めていく傾向が強く、一方の「語り合い」では結論や決定事項を求めない、ということを確認し合った。結論を求めない語り合いは、まさに道徳授業にふさわしいと考える。

本分科会では、理想とする道徳の授業の姿を思い描きながら、語り合いのある授業とは、どのようなものなのかを以下のように考え、定義した。

語り合いのある授業とは

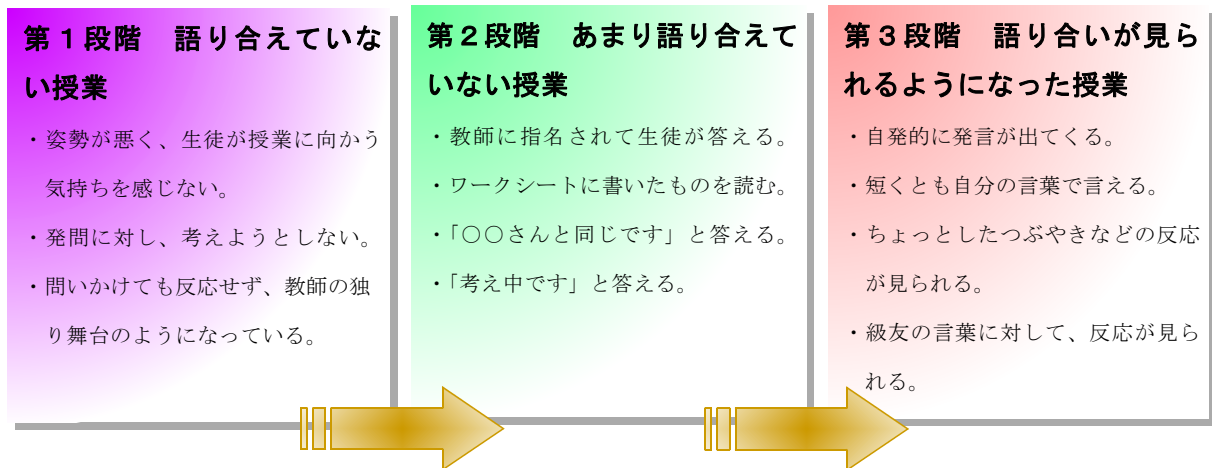
授業全体を通して、生徒が自らの心情・判断を表現すると共に、級友の心情・判断に耳を傾け考えを深め、それが繰り返されている授業

生徒同士の語り合いがなされていくと、様々な見方、考え方にふれ、道徳的価値について深く考えることができるようになり、生徒の語り合いが深まれば、生徒の心に響く道徳の授業になると考えた。また、「語り合いのある授業」では、以下のような生徒の姿が見られると予想した。

語り合いが進んでいる授業での生徒の様子（第4段階）

- ・一つの発言に対して、広がりや深まりが見られる。
- ・思わず何かを言いたくなる、自分から発言しようとする。
- ・「はっ」とするような心が揺さぶられる場面が見られる。
- ・ものの見方、感じ方が変わる。
- ・「ああ、そうか」というような、共感する場面が見られる。

各校の実態を考えていくと、日々の授業の中で、このような語り合いのある授業になっていない現状がある。そこで、「語り合い」を前提にした授業の状態を四つに分け、上のような生徒の様子を第4段階とし、残りの3段階の生徒の様子を分析した。



どのような手だてを講じれば、語り合えていない第1段階から、活発に語り合いが行われる理想的な第4段階に進めることができ、語り合いのある心に響く道徳の授業を行うことができるかを考えていくことにした。生徒同士の心を開かせ、本音で語り合うようにするためには、担任の学級経営の手腕も大きく左右されていく面もあるが、日々の道徳の時間の実践の積み重ねが大切であると考え、どのような授業改善、指導改善を行うことで、語り合いの見られる道徳の授業を行うことができるのかを考え、研究を進めた。

Ⅲ 研究仮説

四つの手だてで授業を工夫し、語り合いを重視した授業を行えば心に響く道徳の時間になるだろう。

四つの手だてとは①資料の選定 ②発問の工夫 ③ワークシートの工夫 ④指導技術の工夫を示している。分かりきった内容ではなく、多様な意見が出てくる資料を選定し、十分に資料を読み込んだ上で中心発問を設定する。また、ワークシートは全ての発問に対して書かせるのではなく、本時の中心となる中心発問について書かせる程度に抑える。その上で生徒の発言が次の生徒の発言につながっていくよう教師の言葉かけを大切にする。

このような四つの手だてで授業の工夫を行えば、生徒同士が語り合う授業になり、生徒の心に響く道徳の授業になるだろうと仮定した。

Ⅳ 研究方法

理想とする語り合う授業に向かうために、以下の四つの手だてを考え、研究を行った。

1 資料選定

資料には、同じ道徳的価値を扱っているものでも、語りやすい資料と語りにくい資料があることに気付いた。資料選定については、資料の要素を検討し、どのような資料が語りやすいか分析した。

まず、資料そのものが、こうあるべきだと示唆している資料「説論的な資料」では、語りにくいであろうと想定した。逆に、答えや結論がはっきり分からない、答えや結論が出ていない資料は語りやすいのではないかと推測した。このような資料として「主人公が道徳的に変容す

る資料」「場面やその場の雰囲気の変容する資料」があると考えるとともに「葛藤場面」があると語り合いがより深まるとの分析をした。また、中学校学習指導要領解説道徳編P.98に基づき、人間尊重の精神を踏まえ、生徒の興味や関心、発達の段階に応じた内容で、多様な価値観が引き出され深く考えることができる資料が「語り合う」授業にはふさわしいと考えた。さらに、生徒の感性に訴え、感動を覚え、人間の弱さやもろさに向き合い、生きる喜びや勇気を与えられたり、生や死の問題、先人が残した生き方の知恵など人間としてよりよく生きることの意味を深く考えることができることや、体験活動や日常生活等を振り返り、道徳的価値の意義や大切さを考えることができ、悩みや葛藤などの心の揺れ、人間関係の理解等の課題について深く考えることができる資料を選定することが、語り合いにはより欠かせないと考えた。

既存の資料には、以上の要件を満たす素晴らしい資料が多くあるため、生徒の実態に合った資料を探し、選定する必要がある。また、道徳の年間指導計画作成においても、学級経営等を考慮し「語り合える」という視点で資料を取り入れることも大切である。

2 発問の工夫

発問の工夫において、資料分析は最も重要である。その資料分析の方法としては「資料分析表」の作成が有効である。(※V 研究の内容の項参照) 作成上の留意項目は以下の通りである。

- (1)「資料の場面」：資料のどの場面を取り上げ、何を考えさせるかを決定する。
- (2)「登場人物の心の動き」：(1)で取り上げた場面に書かれている登場人物の心の動きを分析する。
- (3)「発問の構成」：(2)で分析した登場人物の心の動きと授業のねらいの関わりで「発問」を構成する。
- (4)「指導上の留意点」：発問に託す教師の願いや意図を記入する。

発問を考える上で、最も大切なことは、中心発問がねらいとする道徳的価値と正対していることである。そのためにも事前の入念な資料分析は欠かせない。また、中心発問に迫るための基本発問、補助発問も大切である。どういう発問をすれば、「語り合い」が広がるかを考えることが重要であり、指導案の「予想される生徒の反応」が様々に考えられる発問がよい発問であると考えた。

3 ワークシート

道徳の時間において「生徒は書く活動を通して、自分のものの見方、考え方、感じ方などを確かめたり、まとめたり、記録に留めたりすることができ、それらを基に今までの自分のものの見方、考え方、感じ方を振り返ることもできる」(中学校学習指導要領解説道徳編P.101)と記載されている。このように書く活動も言語活動の一つとして欠かせないものであるが、本研究では、語り合いを補助する手だてとしてのワークシートの在り方を模索した。

生徒が十分に語り合い、道徳的価値について考えをまとめるためにはワークシートの効果的な活用の在り方を考えることが大切であり、以下のような手だてを行った。

(1) ワークシートに発問を記載しない

発問を先に提示すると、資料について考えを深める前の段階で、ワークシートに記入してしまう生徒がいる等、一つ一つの発問に対して集中できず、道徳的価値について十分な深まることができないことがある。そのため発問は、その都度提示して記入させる。

(2) ワークシートを一部で活用する

全ての発問に対して書く活動を行うと、書く活動に集中し過ぎ、語り合いやすいような雰囲気づくりができないと考える。そのためワークシートの活用は、中心発問や終末などの一部で活用する。

ただし、積極的に発言できない生徒もいるため、ワークシートにメモをとるなど補助的に活用することは重要である。

(3) ワークシートの交換

各自が記入したワークシートを相互に交換することにより、他者のものの見方や考え方を推し量ることができる。また、友達がコメントを記入して本人に戻すなどの工夫により、それを読み返すことで、自己理解や他者理解につながり、活発な語り合いにつながると考えた。

その他、これらを2人組や小グループで行っても効果的と考えるが、日頃の人間関係を観察し、効果的な学習が行えるように配慮する。

(4) ワークシートのファイリング

「生徒が書いたものはファイルなどして、自分自身の感じ方や考え方の変化を確かめたり、自分自身の成長を実感し明日への課題をもつことができるようにしたりすることなど、有効に活用することが求められる。」(中学校学習指導要領解説道徳編「学習指導過程の創意工夫」展開の工夫)とある。

具体的な教師の働きかけとして「以前書いたものを読み返す機会をつくる」、「あらかじめファイルしやすいよう穴をあけてワークシートを配布する」など、自己の変容について振り返りやすいよう配慮する。これによりさらに深みのある語り合いの活動につながると考える。

4 指導方法の工夫

「道徳の時間の指導は、道徳的価値についての単なる知的理解に終始したり、行動の仕方を一方的に指導したりする時間でなく、(中略)生徒が道徳的価値を内面的に自覚できるよう指導方法の工夫に努めなければならない」(中学校学習指導要領解説 道徳編「生徒の内面的な自覚を促す指導方法を工夫する」)と記載されている。それをふまえた上で生徒が積極的に語り合うための教師の指導方法の工夫として、次のように考えた。

(1) 生徒の意欲を引き出したり認めたりする言葉がけ

教師は生徒とともに考え、悩み、感動を共有していく姿勢で授業に臨み、受容する態度が重要である。特に道徳の時間では、生徒一人一人が道徳的なものの見方や考え方を深められるような適切な言葉がけをすることが、大きな意味をもつ。生徒がより自分の考えを深められ、心が揺さぶられるような魅力的な教師の言葉がけは、生徒にとって積極的に語ろうとする意欲を高めるのに効果的だと言える。

(2) 生徒の発言に対する教師の対応

積極的な語り合いのためには、生徒の多様な感じ方や考え方を引き出すことができるよう、教師の共感的理解や人間味のある問いかけ、より考えを深めるための切り返しの技術、内容の補足のための発問の工夫、生徒の実態に合わせた授業での補助発問の工夫などが重要である。これを教師が効果的に行うことで、生徒が充実感をもって語り合い、考えを深め、ねらいに迫る展開にできるといえる（具体例についてはV-4 実証授業の授業記録に記載）。

(3) 授業記録の活用

より充実した授業を行うためには、授業記録をとり、振り返ることが必要である。そのためレコーダーやVTRで授業を記録し、文字化して分析をする。これにより、授業時には気がつかなかった改善点を見つけたり、効果的であった部分を再認識したりできる。

また、これを他の教員に見せることにより、他者からのアドバイスを受けられ、授業の改善に役立てることができる。

(4) 授業の取組についてのアンケート

本時のねらいに沿った授業になり、生徒の心に響く授業になったかどうかを客観的に評価する一つの材料として、部員の各校で毎時の道徳の授業の終了時にアンケートを行った。アンケートの項目については生徒が自己の活動を振り返りやすいようにすること、授業終了時にあまり時間がかからず、手早くできるものとして検討した。検討した結果は以下の表のようになった。評価の段階は四つにして、「どちらでもない」という項目をなくし、生徒の方向性がしっかりとつかめるように工夫した。これを毎回行い、集計した結果を基に、授業改善に努め、より充実した授業を目指すことにした。

1. 資料に興味をもてたか	とても興味をもてた	興味をもてた	あまり興味をもてなかった	もてなかった
2. 問いかけについて	とても考えやすい	考えやすい	少し考えにくい	考えにくい
3. 友達の発言を聞くことができたか	とてもよく聞いた	聞いた	あまり聞けない	聞かない
4. 自分の意見を言うことができたか	積極的に言えた	言えた	あまり言えなかった	言えなかった
5. 授業のテーマについて考えたか	とても良く考えた	考えた	あまり考えられない	考えられない

V 研究内容

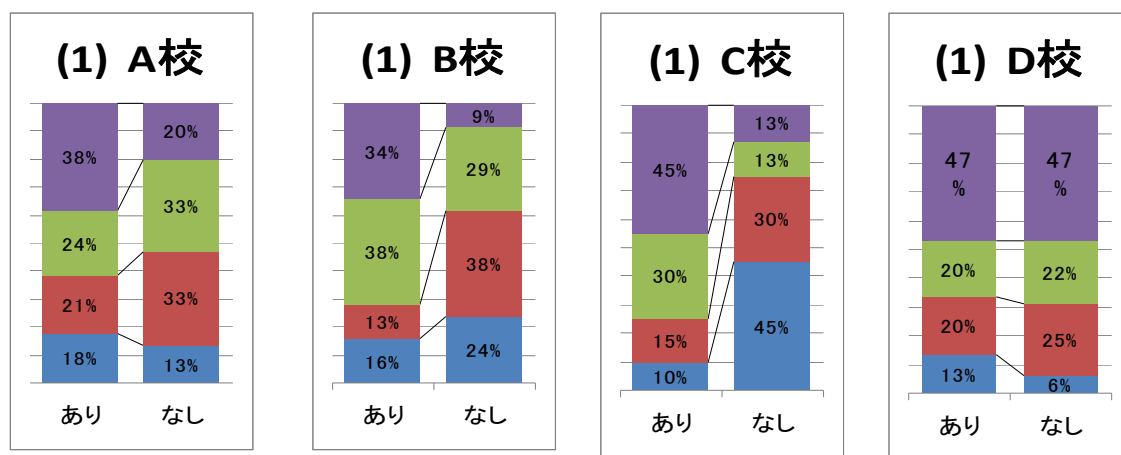
1 中心発問に対する生徒の考えをワークシートに書かせる授業と書かせない授業の比較

「語り合いのある授業」にするために、ワークシートをどの段階で使うことが望ましいのかを考えた。IVの3で述べたように、全ての発問に対して書く活動を行うと、語り合いの雰囲気づくりができないと考えられた。しかし、中心発問は生徒にしっかり考えさせたいという教師の願いもあり、中心発問はワークシートに書かせているという実践が一般的に見られている。そこで、同じ学級で中心発問とまとめの感想をワークシートに書かせる授業と、中心発問もワークシートに書かせず、まとめの感想のみワークシートを活用するという授業の比較を行った。比較には、IVの4に記載した授業アンケートを集計して分析を行った。

(1) 「自分の意見を言えたか」について

(「下図 質問(1)」 下から積極的→消極的傾向)

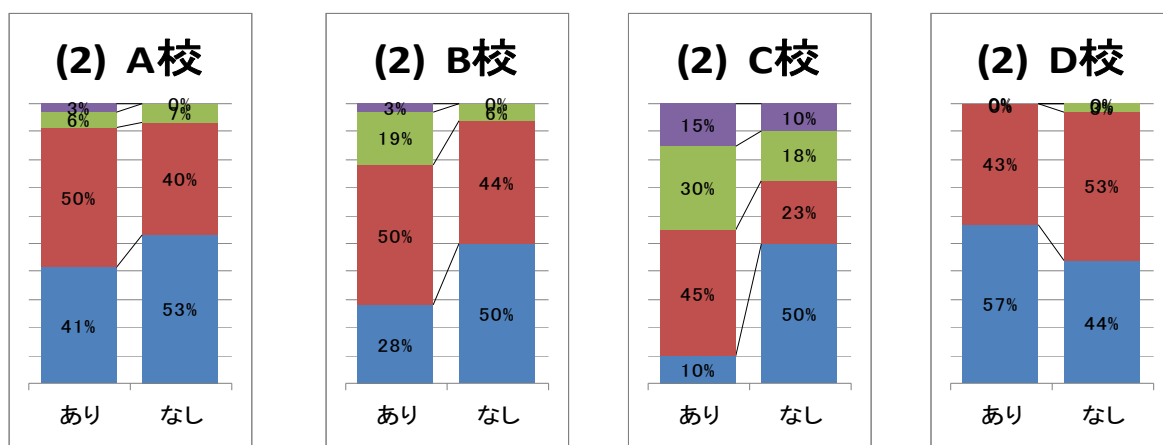
4校中3校は、ワークシートなしで授業を行った方が、ワークシートありで授業を行った場合よりも「言った」「積極的に言った」という割合が増えている。特にC校では「言った」と「積極的に言った」という割合が25%から75%へと大幅に変化している。これはワークシートを使わずに授業を行った方が、生徒の発言が増えるということを表していると考えられる。この検証を行う前は、ワークシートに書かせた方が生徒の発言がしっかりと行われるのではないかと予想したが、本部会では、書かせないことで生徒の発言が増えることがあるということが分かった。



(2) 「友達の発言を聞くことができたか」について

(「下図 質問(2)」 下から積極的→消極的傾向)

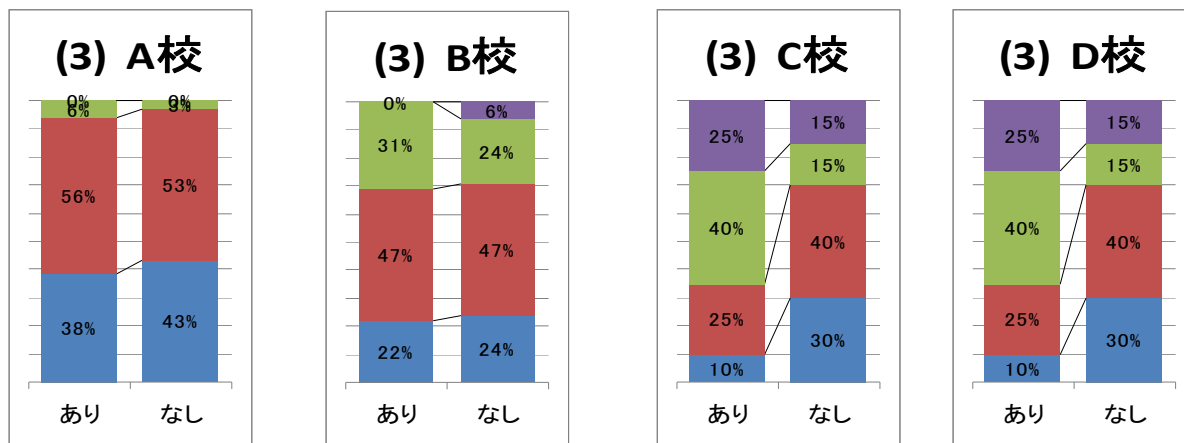
1校はワークシートありの方が「聞いた」「よく聞いた」の割合が高かったが、3校についてはワークシートなしの方が圧倒的に「聞いた」「よく聞いた」の割合が高くなっている。発言を聞けたかという項目についても、ワークシートなしの方が、生徒の積極的な傾向が見られた。



(3)「授業のテーマについて考えたか」について

(「下図 質問(3) 下から積極的→消極的傾向)

これまでの2項目同様、ワークシートなしの方が圧倒的に積極的傾向の結果が出た。「深く考えた」「とても深く考えた」という項目において、ワークシートなしの方が平均して75%もの生徒がそのように答えている。興味深い結果になったのはD校である。発言や聞くという設問においては、あまり変化が見られなかったが、授業のねらいである、主題について深く考える生徒が増えた。理由として、書く活動が少なくなったために、発言は多くなかったものの、色々と思いを巡らせ、考えを深めることができたからであると考えられる。



(4) 全体の結果を通して

各校で取り組んでいる授業の主題や資料が違っているため、厳密に断定することはできないが、ワークシートなしの方が、発言をする傾向が強く、友達の発言にも耳を傾けることができるようになると言える。すなわち、語り合いの授業に近づくことができ、有効な手だてであると考えられる。また、語り合いの授業に近づいたことで、授業の主題についても生徒の考えが深まっていると考えられる。

ワークシートありの方が生徒は安心して発言したり、また友達の発言に耳を傾けたりするのではないかと思われがちであるが、実際はワークシートなしの方がより活発に生徒の発言を引き出したり主題について深く考えさせたりすることができることが分かる。中にはワークシートに書かせないと発言を引き出せない生徒もいる。また、主題によってはむしろ書かせた方がより考えが深められる状況もある。しかし、この調査結果から考察するに、ワークシートなしの方が多くの発言を引き出し、級友の発言に興味深く耳を傾けさせながらねらいに迫っていくような授業を展開していくことができると考える。

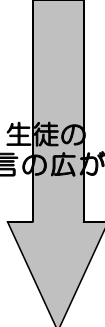
2 授業記録による道徳の授業の振り返り

次に、教師の指導方法の工夫についてどのようにしていくかを考えた。

語り合いの授業を行うには、教師の言葉がけが重要である。そこでVTRによる授業記録をとり、授業を振り返ってみることにした。次に紹介するのはA校の事例である。教師の言葉がけによって

生徒の反応や発言がどのように広がっていくかを分析した。

授業記録（抜粋） 資料：「私と移動入浴車」

教師 略～	生徒 略～
<ul style="list-style-type: none"> ・入浴車を待っていたおばあさんの気持ちはどうだったのでしょうか？ ・楽しみにしすぎて、裏切られた気持ちになったんですね。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・こういうことがあったか、A先生（T2）にも聞いてみましょう。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;"> <p>（A先生）「そうね、理科室で5組の生徒を待っていてもだれも来ないときかな。」</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなのことがかわいいから、不安にならないよ。泣かなかったけどね。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・いるはずの人がいないと寂しいかもしれませんね。 <p style="text-align: center;">～略</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一生懸命やってくれるからまた来てほしいと思っている。 ・ひとりぼっちだから私が心の支えだと思っている。 ・待っている間が不安だったと思う。 ・来てほしいという不安からすごく長く感じたと思う。 ・楽しみにしていたから裏切られた気持ちになったと思う。 ・不安になる？ ・泣いたの？ ・ああ、そういえば ぼくはサッカー部の集合の時、だれも来なかった時があって逆に不安になった。 ・あーそういうことがあった。 ・孤独を感じた。 ・このおばあちゃんもそうか。 <div style="text-align: right; margin-top: 20px;"> <p>生徒の 発言の広がり！</p>  </div> <p style="text-align: center;">～略</p>

この記録は、A教師の言葉をきっかけに生徒の発言が広がった様子である。例えば「ああ、ぼくもサッカー部の集合の時、だれも来なかった時があって不安になった。」という発言に見られるように、自分の経験に重ね合わせ、そこからおばあさんの気持ちに迫っている。他の生徒もその発言を受け、おばあさんの気持ちの理解を深めている様子が見られた。

この授業記録から、教師の言葉がけや教師の対応が生徒の意欲を引き出し、語り合いの授業に近づくための手だてとして、とても重要であることを確認することができた。場面に応じて言葉のかけ方や対応の違いがあるが、教師が生徒の言葉をありのままに受け止め、ねらいとする価値に迫れるように補助的に言葉がけをしたり、思考することを促したりしていこうという心構えで授業に臨むことが必要であると考えた。

3 実証授業に向けての取組

(1) 資料の選定

「研究の方法」で述べたように、語り合うために有効な「主人公の気持ちが道徳的に変化する

もの」と「場面やその場の雰囲気の変容するもの」の資料で授業実践することにした。

しかし、各校の道徳の年間指導計画との関連や、担当している学年の違いがあるために、資料をそろえて授業を行うことは難しかった。そこで各校がそれぞれ道徳の授業の実践を行い、生徒が十分に語り合える授業にふさわしい資料探しを行った。

検討していく中で、説論的な傾向のある資料は、生徒が資料の中に答えを探してしまい、中心発問において、広がりのある反応が表出しづらいということが分かった。広がりのある反応が見られないということは、誰かが答えた内容に対して、異なった反応を出しづらいため、生徒は沈黙し、予想外の反応に驚くなどのことが少なく、語り合いのある授業にするには難しいと考えた。

また、様々な資料で実践する中で、葛藤をする場面が含まれる資料は、生徒が深く考え、多様な反応が出やすいということが分かった。特に生徒自身の身近で道徳的な問題を含む資料の場合、自分の経験と照らし合わせることができるため、しっかりと考えようとする生徒が多く見られた。

そこで授業を行うに当たり、以上をふまえ、ねらいとする道徳的価値についても考慮しながら、語り合いのある授業にふさわしい資料をそれぞれ持ち寄って検討を重ねた。その結果、「足袋の季節」が適切であるということに部員の意見が一致した。その理由として、登場人物の気持ちが大きく変化を起こす資料であり、資料内の「釣り銭をごまかす」ということで、良心の呵責^{かしやく}にさいなまれ、「おばあさんのところへ再び買いに行けない」と悩む場面や、「釣り銭をごまかした罪悪感」と「ふんばりなさいよ」というおばあさんの言葉から、「知っていて励ましてくれたのだ」としたい甘えとの間でゆれ動く登場人物の葛藤が含まれるからである。また、登場人物の気持ちに変化する場面については、おばあさんの死がきっかけであるが、どうして変化したかを考えさせていくような発問を設定すると、生徒の多様な反応を引き出せると考えたからである。

(2) 発問の工夫

各部員が資料を読み込み、資料分析を行ってから、以下に示すように、発問を吟味しながら資料分析表を完成させた。(資料分析図は、P. 16)

○実証授業「足袋の季節」の発問を構成していった過程について

ア 資料「足袋の季節」で取り上げたい場面を検討

(ア) 小樽郵便局で働いているときの主人公の厳しい状況

(イ) 主人公が釣り銭をごまかす場面

(ウ) 主人公が就職し、謝罪しに行ったが、おばあさんはすでに亡くなっていた場面

(エ) 持って行った果物かごを川に流し、感慨にふける場面

イ 四つの取り上げたい場面から、主人公の心の動きを分析

ウ 発問の検討

(ア) 郵便局で働いている場面で、筆者の置かれている厳しい状況と心情を伝えるため、「小樽郵便局で働いているときの筆者はどんな思いだったか」と発問する。

(イ) おばあさんに「五十銭玉だったね。」と聞かれ、「うん。」とごまかしてしまう主人公の思いを生徒に聞く。

(ウ) 謝罪に向かう場面を中心場面とすることに部員全員の意見が一致した。中心発問は

以下のような案が出た。

案1：おばあさんの死を知り、自分に腹が立ってしょうがなかった筆者の思い

案2：おばあさんの死を知り、泣けて泣けてしょうがなかった筆者の思い

案3：果物かごを川に流したときの筆者の思い

案4：浮きつ沈みつ流れていくかごに、筆者は何を見たか。

→「おばあさんの死を知った筆者はどんな思いだったか。」と聞くことで、文章から答えを探さず、生徒が自分の言葉で考えることを期待した。

(エ) 資料後段の部分で「おばあさんがくれた心とは何か」という発問を考えたが、おばあさんの「ふんばりなさいよ」という言葉から、励まし、思いやり、優しい心などの生徒の反応が予想された。弱さを克服し、より良く生きていこうとするねらいに迫るため、「筆者は今後どのように生きていけばいいだろうか」とした。

エ 発問の再検討

予想される生徒の反応を十分に検討した結果、発問の言葉を多少変えても一方向からの答えしか出ない発問もあることに気づき、生徒から多様な価値観や多様な反応を引き出せる発問でなければ、語り合わせることができないだろうと考えた。そこで(イ)と(ウ)の場面の間に、筆者の葛藤(自責の念とおばあさんが励ましてくれたという甘い考え)を聞くため「釣り銭をごまかした後、おばあさんに会いに行こうと決心するまで、筆者の胸を苦しめた思いはどんなものか。」という発問を入れた。

4 授業実践 (平成22年11月12日)

(1) 主題名 「人間の弱さ醜さの克服」 内容項目3-(3)

(2) ねらい

人間の心の弱さ醜さを克服し、人間らしい良さを求めていこうとする心情を育てる。

(3) 資料名 「足袋の季節」 (中学生の道徳2「自分をのぼす」あかつき)

(4) 資料について

筆者は厳寒の中で貧しくて、足袋を買うお金もなかった。そんな追い詰められた状況の中で大福もち売りのおばあさんから悪いと思いつつ「これで足袋が買える」という思いに負け、釣り銭をごまかしてしまう。就職し、おばあさんに謝ろうと小樽を訪ねるが、すでにおばあさんは亡くなっていたという内容である。本資料の筆者の心の葛藤に視点をしぼり、その心の弱さ醜さと良心について考えさせたい。

(5) 本時における「語り合い」の工夫

ア 資料の選定

本資料は、筆者の葛藤する場面から多様な価値観や多様な生徒の反応が出てくることから、語り合いにふさわしい資料であると考え、選定した。

イ 発問の工夫

資料分析に基づき、多様な生徒の反応が出てくる発問を考えた。

ウ ワークシートの工夫

ワークシートに発問を載せず、自己評価項目とメモ欄を設けた。

エ 指導方法の工夫

- ・学習形態：前後に座った2人で、語り合わせる形を考えた。
- ・教師の言葉がけ：生徒の語り合いをもう一步深めたい時のために、あらかじめ補助発問を考えた。

(6) 指導過程

	○学習活動 ・ 主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導 入	○冬の小樽の厳しい寒さについて理解を図る。	・すごく寒いんだ。	・厳しい寒さであることを理解させ、筆者の心情につなげやすくする。
展 開	○資料、内容等（厳寒の小樽・主人公の状況）を確認する。 ・小樽郵便局で働き始めたとき、少年はどんな思いだったか。 ・釣り銭をごまかしてから筆者の心情を考える。 ・「五十銭玉だったね。」と言われて「うん」とうなずいたとき、筆者はどんな気持ちだったか。 ・釣り銭をごまかした後、おばあさんに会いに行こうと決心するまで、主人公の胸を苦しめた思いはどんなものか。 ○おばあさんの死を知ってからの主人公の心情を考える。 【中心発問】 ・おばあさんの死を知った主人公はどんな思いか。	・寒い。辛い。 ・なんとかして足袋がほしい。 ・もっとお金が欲しい。 ・四十銭あれば足袋が買える。 ・ごまかしちゃまずいよな。 ・ごまかしたことがばれなければいいが怖い。 ・人間として許されないことをしてしまった。 ・自分の良心をもごまかしてしまったのだ。 ・今更会いに行っても許してもらえないだろうか。 ・取り返しがつかない。 ・もう謝ることはできない。 ・お金を返しておけば、後悔することはなかったのに。 ・自分に腹が立った。	・厳しい環境で生活する主人公が置かれている状況を感じ取らせる。 ・状況によっては、人は理性的判断が鈍ることがあることを押さえる。 [補助発問] ・悪いと知りながら、どうしてお金をごまかしてしまったのか。 【2人組の語り合い】 ・主人公の後悔、自責の念について考えさせる。 ・人間は誰でも自己の人格的承認を回復したい欲求があることを考えさせる。 [補助発問] ・どんなことに腹が立ったのか。 ・腹が立つとはどういうことか。
終 末	○主人公は、今後どのように生きていけばいいだろうか、ワークシートに書く。 ○「thinking」を読み、考えたこと感じたことをワークシートに書く。	・自分の弱さを乗り越えて生きる。 ・自分の心の甘さや誘惑に負けないで生きる。 ・人間として恥ずかしくない生き方をする。	・主人公の今後の生き方を考えさせることで、弱さを克服し、より良く生きていこうとする心情について考えさせる。

(7) 評価

- ・人間の弱さ醜さを知り、乗り越えていく大切さを理解しようとしたか。
- ・弱さ醜さを克服し、より良く生きていくことの大切さを理解したか。

(8) 授業記録

教師	生徒
<p>(前略)</p> <ul style="list-style-type: none"> いくら持って行かされたんだっけ？ 10 銭持って餅を買いに行きました。そしたらおばあさんがなんと言ったんだっけ？ 「うん」とうなずいたときの私の気持ちは？ 	<ul style="list-style-type: none"> 10 銭 50 銭玉だったんだね。 正直に言おうと思ったけど、足袋が欲しいのに負けちゃった。 ラッキー
<p>・ラッキーの中身を教えてください。</p>	<p>指導方法の工夫 (教師の言葉かけ)</p>
<ul style="list-style-type: none"> 40 銭は何をしようと思った？ 二人はこう言ってくれましたが、二人が言ったことに対してでも良いので、同じ意見や違う意見はありますか？ 「こんなことして良いのかな？」ということは、おつりをごまかして良いと思ってるの？悪いと思ってるの？ 悪いと思ってるのにどうしてごまかしたの？ 欲しかったらごまかして良いの？ 何でだめなの？寒いんだよ。 	<ul style="list-style-type: none"> 40 銭も得した。 得して足袋が買える。 本当にこんなことしていいのかな？ 悪いと思ってる。 足袋が欲しい。 だめ。 おばあさんかわいそう。(座席の前後で話し合い)
<p>・釣り銭をごまかしてからおばあさんに会いに行くまで、「主人公の胸を苦しめた思い」とは何でしょう。前後の二人で話してみましよう。</p>	<p>指導方法の工夫 (学習形態)</p>
<ul style="list-style-type: none"> みんな友達同士で話すと安心するね、笑顔が出て。では話し合ったこと手を挙げて言ってください。 どうですか。話し合ったことがあったら発表してください。同じだった人。(全体の様子を見る) 	<p>何であんなことしちゃったのかな。</p> <ul style="list-style-type: none"> 釣り銭ごまかした思いと、がんばれよと言われた両方が入り交じった気持ち。 自分の罪の意識と、かすめとったおばあさんの励まし。 もうはれている。
<ul style="list-style-type: none"> さて、この人はおばあさんに会いに行っただけ、何をしに行っただっけ？ そしておばあさんはどうなっていた？ おばあさんが亡くなったということを知った私はどんな思いになったのでしょうか？ <p>発問による生徒の多様な反応</p>	<ul style="list-style-type: none"> お金を返しに行った 亡くなっていた。 もっと早く謝っておけば良かった。 ごまかしたことを後悔した。 本当のことを言わなかった後悔した。 同じで、ごまかしたことを後悔した。 その時に謝っておけば良かった。 本当のことを言いたかった。 おばあさんに1度も謝れなかったことが悔しかった。 かすめとったから、自分に腹が立つ
<p>(中略)</p> <p>(ワークシート配布)</p> <ul style="list-style-type: none"> 主人公はその後、どのように生きていけば良いか、考えてみてください。 では、発表してもらいます。発表してくれた人の意見で、自分に近い考えや、自分と違う考えがあればメモ欄に書いて下さい。 	<p>(ワークシートへ記入)</p> <ul style="list-style-type: none"> 後悔しないように、これからは正直に生きる。 他人にでも親切にし、おばあさんみたいな優しい心をもって生きていく。
<p>・全く一緒？</p>	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇さんと一緒です。
<p>指導方法の工夫 (教師の言葉かけ)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇さんと似てて、正直に生きる。 人にうそをつかずに、おばあさんのふんばりなさいよという言葉をお忘れずに生きる。 足袋を大事にして生きる。
<ul style="list-style-type: none"> 「足袋を大事にして生きる」って？ もう少し頑張ればいいのに。 もっと分かりやすく言うとどんなこと？ 	<ul style="list-style-type: none"> おばあさんがくれた・・・分かんない。 気持ち、かな？ 優しい心をもって生きていく、かな？

・〇〇さんの意見が聞きたいな
(まだ発言していない生徒に発言を促す)

・副読本「思い出したくないことがある」
を朗読

(教師の説話)

・私も思い出したくないことがたくさん
あります。穴の中に潜り込んでしま
いたいような顔が真っ赤になるよ
うなことをしています。と、「恥ずか
し」って思っている。「次に進める力
になるのかな」って思いました。
・では、感想を書いてください。あと、
裏評価も書いてください。
・感想を発表してもらいます。
(後略)

・これからは自分が困っている人を助けてあげなければならない。



(9) 授業後の考察 (自己評価の結果・授業記録から)

資料について、32人のほとんどの生徒が興味をもって資料を読んでおり、生徒をひきつけることのできる資料であった。また、生徒への問いかけは、「少し分かりにくかった」が2人、「分かりにくかった」が1人で、考えやすいと感じた生徒が多かった。例えば授業記録の「ラッキー」のように単語で答える生徒に対して、「ラッキーの中身を教えてください」と説明させたり、「〇〇さんと一緒です」という答えには「全く一緒?」と問い返すことで、考えていることを表現させたり、次の発言につなげたりすることができた。また、2人組の語り合いは、発言が増え(授業記録の点線枠内)有効であった。課題としては、考えを言わなかったとしている生徒が約半数おり、自発的に語ることや生徒同士の語り合いの深まりが少なかったことである。

VI 研究の成果

1 資料選定

資料を選定していく上で、大きく3つの種類に分け、語りやすい資料であるかそうでないかを分析することで、資料の読み込み方が変わってきた。教師が道德の授業を通して、生徒の道德的な価値の自覚を深めるため、一層の資料の読み込みが必要である。常に生徒の視点に立ち、語り合い活動の充実を通して、道德的価値を深める資料の重要さが分かった。

2 発問の工夫

生徒の多様な意見に出させるため、資料をより深く分析し、登場人物の心情を考え、その内面に潜む道德的な価値を読み込み、語り合いを進めやすい発問の工夫をした。また、予想される生徒の反応をしっかりと考え、生徒の考えがどの程度広がり、深めることのできる発問なのかを見極めるために、一つの発問を何度も見直し検討していくことが、語り合いを引き出すことにつながるということが分かった。本部会では発問構成は「道德の時間」の決め手と考えた。

3 ワークシートの工夫

語り合いを補助する手だてとしてのワークシートの記入について、生徒は、その場で感じた

り考えたりしたことを文章化するため、考えを再構成する時間が必要である。その時間により、語り合う雰囲気が高まった授業の流れを途切れさせてしまうことがあった。発言であれば生徒が単語で発言したとしても、教師の切り返しの発問によって深めさせることができる。しかしワークシートでは、書いたことを読みあげるだけになることが見られ、他の生徒の発言に対して新たな考えが浮かんだことを加えて発言する、などの広がりには乏しくなることがあった。書くことに集中しない分、聞くことに対して集中力が高まることから語り合いの活動には、ワークシートに頼り過ぎないことが大切である。また、ワークシートを語り合いに効果的に結び付けるため、どの場面で記入させるかを検討したことで、生徒の発言や聞くこととの関連性を知ることができた。

4 指導方法の工夫

様々な指導方法の中で、「教師の言葉がけ」にこだわり、授業記録をとって分析したことで、教師のどのような言葉がけが生徒の思考を深め、次への発言につながるか、その一端を知ることができた。また、教師の姿勢が、語り合いの授業を成立させるためには大切であることが分かった。特に、生徒の発言に対して、教師の意図的な切り返しの発問を入れることによって、生徒の考えをより深めさせることや、教師が望む反応を待ち過ぎてしまうことで、生徒は発言しにくくなることも分かった。さらに実証授業で座席の前後での話合いを取り入れたことで、教室内の雰囲気に安心感が漂う場面が見られた。

中学生は自我の目覚めがあり、自信がもてないものを表に出しにくい面がある。「間違えてはいけない」「他と変わったことは言えない」という気持ちだけではなく、自分の心をさらけ出しにくいということが、語り合いを困難にさせる。こうした生徒の心の緊張感をほぐすことから、語り合いの授業を目指すための教師の指導技術の工夫は、必要不可欠である。

VII 今後の課題

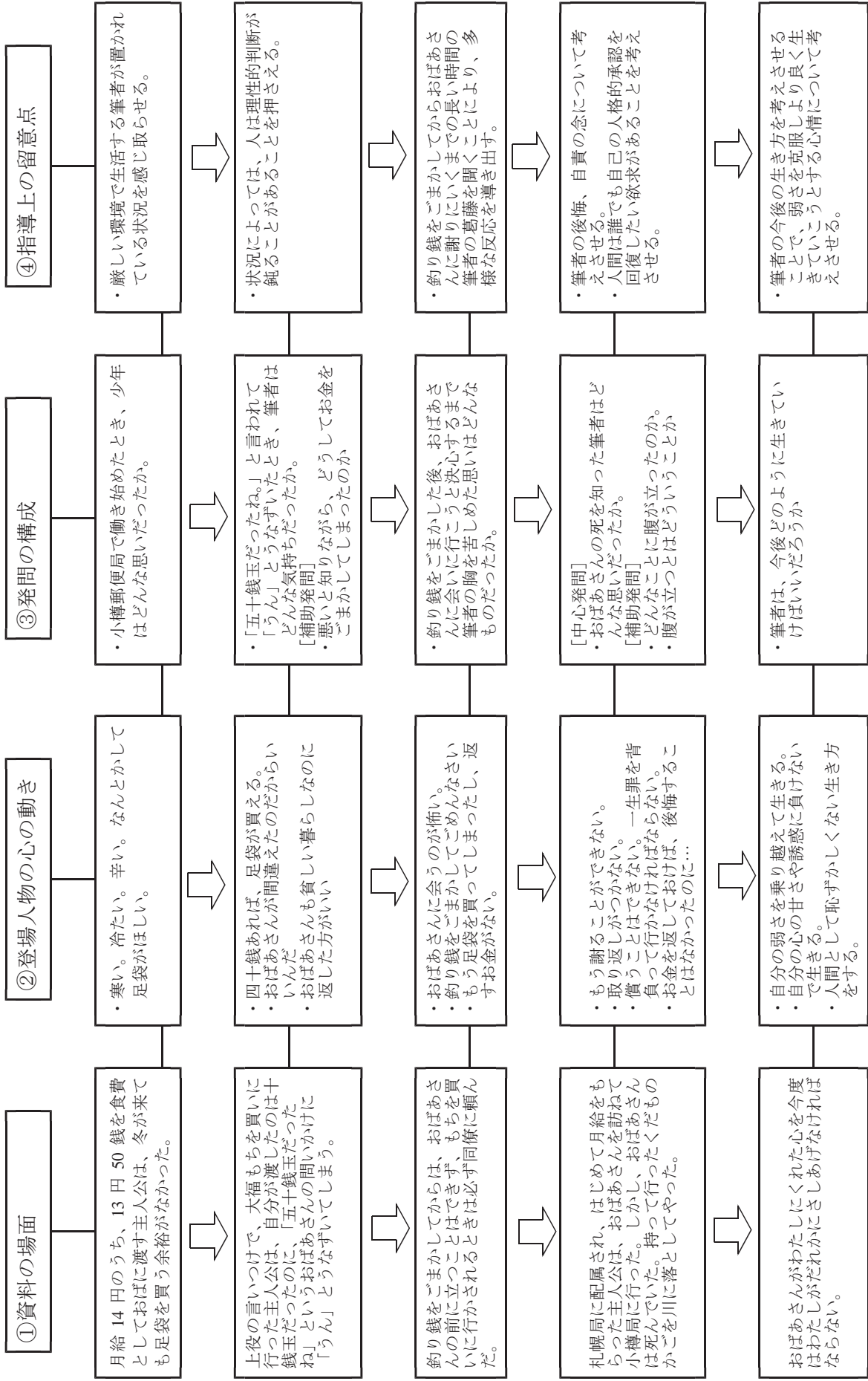
「道徳の時間」の全ての場面で生徒同士が自発的に語り合う授業を目指し、研究を進めてきたが、実証授業では、生徒同士の十分な語り合いにまで高めることはできなかった。道徳の時間で小学校と中学校を比べてみると、中学生の発達段階では、自分に自信をもてなくなったり、恥ずかしさが先に立ったりする傾向が見られ、心をなかなか開けないという特有の難しさを感じた。ただ自分の考えに自信がもてると、積極的に発言しようとする姿が見られることは小学生も中学生も変わらないと考える。本部会で考えた、語り合いの第3段階の状態から、第4段階の状態まで引き上げることは容易ではなく、「こうすれば必ず生徒同士が語り合える」というものではないが、日々の授業実践の積み重ねによって、理想とする語り合いの授業に近づけるようになる、という希望をつかむことができた。

今後さらに、発問の構成や指導方法の改善をしていくとともに、語り合う道徳の時間を構築するために、日頃の学習活動（各教科等）に「話合い」「語り合い」の機会の設けることが大切であり、その在り方を考えていく。

語り合い活動を通し、心に響く道徳の時間を積み重ねていくことで、学級の間関係や温かい雰囲気がつくられていくと考える。全教育活動における道徳教育の「^{かなめ}要」とする道徳の時間を重要視し、語り合いを重視した道徳教育を一層推進していくことが課題である。

道徳資料分析表

資料「足袋の季節」 主題名：人の弱さ醜さの克服3 - (3) (あかつき 中学生の道徳2「自分を考える」)



※分析表に本分科会の語り合いを重視した発問等を加えた。

平成22年度 教育研究員名簿

中 学 校 ・ 道 徳

地区	学 校 名	職名	氏名
目黒区	第一中学校	主任教諭	中島 由美子
中野区	南中野中学校	主任教諭	甲斐 千嘉子
杉並区	井荻中学校	主任教諭	○池田 和幸
板橋区	上板橋第三中学校	主任教諭	宮下 妙子
江戸川区	春江中学校	主幹教諭	◎城戸 加代子

◎ 小・中合同世話人 ○ 世話人

[担当] 東京都多摩教育事務所 指導課 指導主事 今宮 直樹

平成 22 年度
教育研究員研究報告書
中学校 道 徳

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成 23 年度第 46 号〕

平成 23 年 6 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6836
印刷会社 有限会社 シーダー企画
住 所 東京都新宿区西五軒町 7-10
電話番号 (03) 5228-3451